

## 墓廟建築の類型化とムガル庭園墓廟の展開について

### —タージ・マハルを中心に—

古橋 達弘

インドのイスラム諸王朝の墓廟建築は、支配階級の民族によりその特徴を変えるという特徴を有する。特にムガル朝期にはその血筋であるティムールの様式を踏襲するとともに、庭園の中に墓廟を配置するという形式が起こり、ムガルの皇族や貴族の墓に特に用いられた。これを一般に庭園墓廟と称し、そのうちで最も有名なものにタージ・マハルがある。

タージ・マハルに関してはこれまで様々な考察がなされてきたが、その最も優れたものの1つにビグリー W. E. Begley の神秘主義的考察があり、これが現在の定説となっているように思われる。しかし、モイニハン E. B. Moynihan 等による最近の調査により、タージ・マハルの対岸に存在したマハターブ・バーグがタージ・マハル墓廟建築物群に含まれていたことが明らかにされ、ビグリーの考察の一部が再考を要するようになってきたように思われる。特にその論文第6節の、タージ・マハル建築物複合群のレイアウトを「審議の平野」と見る記述は、当然ながら、マハターブ・バーグを考慮に入れたものではないので、今後はマハターブ・バーグをも含めて再考される必要があるように思われる。

ここで取り上げる主題は、墓廟建築という観点からタージ・マハルの建築様式を考察することである。ムガルの墓廟建築はインドのイスラム社会において発展したとはいえ、その基本的な概念は遊牧民の墓廟観に基づくも

のであると考え、今回は平面図に絞ってその建築様式を追うことに努めた。しかし、いくらそうであったとしても当時のスーフイズムからの影響を抜きにして墓廟建築物を考察するのは片手落ちであるかもしれない。それは今後の課題として残し、スーフイズムに関しては簡単にまとめるに留めた。

#### 墓廟建築

墓廟建築を見るにあたって、まず考えなくてはならないことは墓それ自体と建築物との関係である。

イスラムの教義に従えば、イスラム教徒にとって墓は特別な意味を持つものではない。墓がないわけではなく、墓自体は死亡した者が最後の審判の日を待つ間の仮の宿のようなものである。

イスラム勃興後200年ほどの間は立派な墓を建てることはなかった。権力者の墓ないし墓廟が本格的に建造されるのは9世紀後半以後のことである。

現存する最も古い単独の墓廟の例はアッバース朝のムンタシル（在位861-62）の墓で、これ以降権力者の墓は各地で建てられるようになり、トルコ人の進出とともに目立って増加した。

権力者達は当初は大モスクを建設することによって自己顕示欲を満していたが、それだけでは飽きたらず次にマドラサを作るように

なった。そもそもマドラサとモスクは機能や役割の面で異なる建築物であり、その建築意図からして異なるはずであるが、どういうわけか「モスクには（原則として）墓がないが、それと対照的にマドラサには墓がある」。マドラサに教育機関としての機能のみ追求するのであれば墓は必要ないはずであるが、実際にはマドラサの建築ラッシュの起こった時代には墓のないマドラサは数えるほどしかない。当初のイスラム教徒の墓廟建築は、その施設内に教育設備や機能を有する「複合建築物内の墓」であり、意図は明確であってもあくまでも表向きには「墓」が中心ではないことになっていた。

モスク内部には一部の例を除いて墓はない。モスク付近あるいはその敷地内に墓がない理由を羽田は3つ挙げている。1. 墓地で礼拝を行ってはならず、「信徒の行動の規範となる法学書には『墓のある建物をモスクにしない』という規定もある」という宗教的な理由と、2. モスクは都市の中心に位置することが多く、モスクに墓を建てる十分な空間がない、3. イスラム教は土葬の習慣のため衛生面を考慮し一般的に墓は郊外に作られた。

墓はその後新たな展開を示す。墓廟周囲に建築物を併設することによって一種の都市（墓廟都市）を形成するに至ったのだ。

マドラサの展開を見せたイランでは、13世紀に東方からのモンゴルの侵入を許したことにより建築に多大な影響を受けることになった。

ガザン以前のモンゴル人の墓は人知れず造営され、その場所も明らかにされないという慣習を有する。イスラム教徒の墓は前述の通りである。いずれにしる墓は建設されても明らかにされないか、あるいは表立って墓とさ

れていなかった。しかし、君主であるガザン自身が自らの墓廟を建設することを命じたため、これ以後墓は隠されるものから表に出すもの、目立つものへと変容を遂げたのである。また、これらの墓は都市部に建設されず、遊牧民の好むような水と草の豊かな場所に建てられた。

ガザンの墓廟には次のようなものが併設された。マドラサ、ハーンカー、病院、図書館、天文所、法律の館、ワクフ管理人の邸宅、貯水場、公共浴場などである。ガザン以降の墓はまず先に墓を作り、それに併設される形で複合建築物群を形成する。この点で以前とは異なる墓廟観を見ることができる。

為政者や権力者の墓とは別に聖者廟という墓がある。インドにおいてダルガーという聖者廟が現れた。このスーフィー聖者の墓の出現、一般化により、インドにおける墓廟建築に新たなカテゴリーが加わり墓廟に参拝するという行為も広く一般化されたと考えられる。

### 墓廟建築の様式の変遷

インドにイスラムの墓廟建築がもたらされたのは、デリー・サルタナット時代において他にはない。インド外部の墓廟建築の動向を見ると、奴隸王朝が興った時点ではまだ、墓廟建築物複合体は確立されていないと考えられる。それ故、アフガニスタンを経由してインドに初めて持ち込まれた墓廟建築は単独に墓廟を建立する部類のものと考えられる。

デリー・サルタナット時代全般における墓建築の数は多いとはいえ、デリー・サルタナット前期の造営と思われる遺蹟の残存数は少ない。サルタナット初期の奴隸王朝時代に造られた墓で現存しているのは一部のスルターンとその一族のものしかない。これに比してデリー・サルタナット後期の遺蹟の数が多

ことから、初期においてはごく限られた高位の人物だけが建築物としての墓廟を営むことができたという推察がある。

現在のデリーにあるローディー公園には、ローディー朝期の墓廟建築物が残っている。公園内にある墓廟建築物のうちで、最も注目し得るのがバラール・グンバド・マスジッドの名で呼ばれるモスクを含む建築物群である。このモスクを主体として考えるのか、あるいは中央にある墓を中心として考えるのかによって見解が分かれるが、この建築物の配置はタージ・マハルへと繋がる点をも指摘しうると考えられている。

デリー・サルタナット初期の奴隷王朝時代の墓廟建築様式である単体で建つ墓廟がローディー朝に入り墓廟建築複合体として変化したと見るにしても、これは変化としては急激すぎるもので、とてもそうとは思えない。ローディー朝期に入り、かつての墓廟建築とは趣を異にする墓廟建築が突然現れた感があるが、この当時には既に中央アジアにおいて墓廟建築物複合体が完成されていたと考えられ、ローディー朝の一族の故郷であるアフガンにおいてもその墓廟建築物複合体が流布していたと考えられる。アフガン系部族民が統治の主たる構成員であるローディー朝がその影響を受けていないとは言えない。ここではやはり外部の影響として考えるのが妥当ではないかと思われる。単独で建つ墓廟建築物を辿っていてもバラール・グンバド・マスジッドというモスクが建てられることはありえない。デリー・サルタナット期のインドにおける墓廟建築は当初単独で建つタイプから始まったが、ローディー朝以降には外部から複合建築タイプが流入したと考えて差し支えないだろう。

1379年にティムールによって侵略した土地

土地の優れた職人や技術者の連行が始まったが、1397年頃にはこの職人・技術者集団はトゥラーンでその制作を始めている。そもそもこの集団の残したものが初期ティムール様式ということになる。この様式の最も特徴的な特色は記念碑性にある。外観が石などで完全に装飾され、内部から同様、外部からも見られることを意図された壮大な建築物が建てられるようになった。この記念碑性という特徴はムガル朝において一層顕著に現れるようになる。

ムガル朝第2代皇帝フマーユーンの墓が後に示す標準となったと考えられる理由の1つは、その墓廟を有する庭園にある。はっきりと年代を確定できないが、この頃より墓廟と庭園が1つとなり、庭園墓廟と呼ばれる形式を形成したと考えられる。

墓廟と庭園がいかにして結びつけられたのか、また墓の導入によってその庭園の宗教的に示す何かが変わるのかどうか分からないため、ムガルの庭園墓廟に現れる庭園の形式をベルシャ起源のチャハール・バグに結びつけることが出来ない。乱暴な意見ではあるが、庭園墓廟にある庭園は、あるいはチャハール・バグではなく、それを基本として変形された亜種であると言わざるを得ない状況にある。

さらにフマーユーンの墓の特徴の1つとして挙げられるのが、高い基壇であり、これもムガル朝の初期に突然現れた様式である。この基壇にある壁龕のデザインと、サルタナット時代末期またはムガル前期に建てられたモスクにある基壇や壁にある龕の共通性について荒は述べているが、荒本人が指摘するように調査から得られた関連性は認められても証明はされていない。また全てのムガル庭園墓廟にこのような壁龕のある基壇が採用されて

いるわけでもないので、建築史的に見ても繋がりを証明することが難しいと思われる。

### タージ・マハル

タージ・マハルは前述の墓廟建築の特徴を兼ね備えている。

まず、バラール・グンバド・マスジッド墓廟建築物群の配置はタージ・マハルに共通する点が見られる。これとほぼ同じ配置がタージ・マハルにも見られるという点である。バラール・グンバド・マスジッド以前の墓廟建築物は、それぞれが独立して建ち、その建物1つで完結するものだったが、バラール・グンバド・マスジッドにおいては建築物群という様相を呈している。そしてそのそれぞれの建築物の配置には、これより100年も後のタージ・マハルと共通する点が指摘できる。バラール・グンバド・マスジッド以前の墓廟建築物にはミフラーブがあり、それが廟堂内の壁の一部であったり、墓廟を囲う囲壁の一部であったりしたが、そのミフラーブがモスクとして独立したという見解に荒はあるようだ。

庭園に関しては、ムガルの庭園には庭園墓廟としての庭園と、居住に関わる庭園の二つの種類があると考えられ、後者においてタージ・マハルと類似の配置が認められる。主に宮殿内や城塞内に見られる形式で、川や水辺に沿って建てられていることからその庭園を河岸庭園と称する。これは専ら涼を取るために用いられたと考えられ、いわば都市型の愉悦の庭園ということになるだろう。これに対して、カシミールなどにある庭園は郊外型と言うことが出来る。都市型の庭園は複合的な庭園構成を廃した郊外型のミニチュア版のような様相を呈するが、そうではなくこの河岸庭園が郊外型の庭園に発展したと考えられている。

最近の発掘調査によってマハターブ・バーグはタージ・マハル墓廟建築物群の一部を形成していたことが分かってきた。マハターブ・バーグ周辺は雨期には頻繁に水没し、上流から運ばれた土砂に埋まることが多かったようで、シャー・ジャハーン時代から既に半ば廃墟と化し、今日ではすっかり忘れ去られていた。

タージ・マハルの建造に関する記述は当時の歴史家によって記されているが、マハターブ・バーグを同時に造園したとは書かれていない。恐らくは先にマハターブ・バーグは造園されており、後に対岸の土地を手に入れ、そこにタージ・マハルを建造したと考えてよさそうである。1635年頃に描かれた細密画にマハターブ・バーグとおぼしき庭園が描かれていることから、少なくともタージ・マハルが完工する以前には既に存在していたことが明らかである。タージ・マハルの用地は元々ラージャ・ジャイ・シングの土地で、タージ・マハルの建設用地として選定された時、彼はそれを進呈しようとしたが、シャー・ジャハーンはその土地と引き替えに「豪華な邸宅を帝国の資産から授けた」のである。そうまでしてこの土地を手に入れたのは、対岸のマハターブ・バーグからタージ・マハルを眺めるために必要だったのではなかったか。そうであればわざわざそこに土地を手に入れる必要がない。この因果関係によってビグリーの考察に再考する必要性が出てきたのである。

タージ・マハルの庭園と墓廟建築物との配置の関係については河岸庭園の影響として見るにしても、附設する建築物に関しては未だ解明できていない点がある。その1つがタージ・マハル墓廟建築群内に存在するモスクである。

インドの墓廟建築物の中でも、ダルガーは

モスクと併存することが比較的寛容であるように思われる。このモスクという例の他にもダルガーに共通する点をタージ・マハルは有している。それは棺を囲う大理石を透かし彫りにしたスクリーンである。棺を囲うスクリーンの例はジャハーン・ギール廟にもその痕跡が見られるが、その開放的な二階部分（現在は存在しない）のそれと、ドームや廟堂内にあるそれとでは多少意味が違うように思われる。方や装飾的な要素の濃いものであるが、方や内部の動線を示す機能を有すると思われるからである。このようなスクリーンはダルガーの他に例を見ないように思われる。モスクがあり、墓があり、そしてスクリーンがあるという共通点から、タージ・マハルはダルガーの構造を有していると言えるのではないだろうか。

タージ・マハルに葬られている人物は聖人ではないが、その建築の様式からするとタージ・マハルはダルガーを思わせる要素を含んでいる。このことから考えられるのは、シャー・ジャハーンには妻であるムムターズ・マハルを聖人として奉り上げる意図があったのではないかということである。とはいえ、それを裏付ける確たる証拠がないため、これは憶測の域を出ていない。ムムターズ・マハルを聖者に仕立て上げていたとしても、その聖者の命日の祝典（ウルス）は、私が調べた限りでは14回目以降（1645年以降）は見られない。とすれば早い時期からタージ・マハルはダルガーとして扱われておらず、またムムターズ・マハルは聖人として扱われていなかった様が推察できる。

タージ・マハルの建造には2つの意図があったと推察される。墓廟建築物としての目的と、愉悦の庭園の一部を形成する目的の2つである。なぜこのように相反する目的を同時

に行ったのかについては何も分からない。デリー・サルタナット時代に見た墓廟建築物複合体が当時の信仰形態や宗教的権威に何かしらの答えを求められるかもしれないように、タージ・マハルにもそれはあるかもしれない。今後はマハターブ・バークをも含め、改めて考察されなくてはならない。

### おわりに

実際のスーフィズムとムガル朝との関わりについては、スーフィー集団が力を蓄え、その権威が政治に関与していたと考えられる。特にナクシュバンディ派は政治に関わることを厭わなかったため、中央アジアでは絶大な権力を有していた事実がある。

ナクシュバンディ派はその起源を12世紀にまで辿ることができるが、体系化されたのは2世紀経ってからのことである。ナクシュバンディ派で注目すべきはその宗教的な活動よりも、政治に多く関与していた点にある。カワージャ・アフラルは15世紀後半には政治的に最も有力な人物として頭角を現し、他のナクシュバンディ派のシャイフ達は、信者からの寄進のみならず行政官から免税で寄付（ワクフ）を受け経済力・個人資産を有し、権力をふるっていた。統治階級によるナクシュバンディ派の容認はその派の政治的影響力を維持し続け、時にその派が兵を挙げて戦闘に加わることもあった。このようにナクシュバンディ派は影の支配者の様相を呈していた。

カワージャ・アフラルの孫であるカワージャ・ユースフは、おそらくバールに同行してインドにやってきた。バールは、中央アジアのナクシュバンディ派スーフィズムとの宗教的関係を保ちながらインドに帝国の基礎を築いた。バールのムスリム名であるザ

ーヒルッディン・ムハンマドは、ナクシュバンディ派でも政治的に特に有力であったカワージャ・ウバイドゥッラー・アフラーが彼の誕生に際して付けたものである。ムガルの歴代の王が中央アジアの系譜であることを常に意識していたのは、その血筋だけではなく、宗教的な繋がりも念頭にあったと思われる。

ジャハーンギールの誕生はスーフイー聖者シェイフ・サリーム・チシュティが予言したと言われている。皇子時代のサリームという名はこの聖者に由来する。子供のなかったアクバルが聖者廟に参拝し、その聖者に占ってもらった結果、その通りに子を授かったという。アクバルは息子の誕生のお礼参りにとアグラからアジメールにあるムイヌッディン・チシュティの廟まで裸足で参拝するほどの傾倒ぶりだった。皇子誕生の予言を的中させてから後、恐らくはその聖者の集団（チシュティ派）を崇める者が宮廷内で増加したと思われる。事実、後にジャハーンギールもシャー・ジャハーンも折りにつけその聖廟を参拝している。「後にアジメールへの巡礼を止めたアクバルや、その住居としてのアジメールを一度離れると決して廟に戻らなかったジャハーンギールとは異なり、シャー・ジャハーンはその統治の終わりまでアジメールで聖人に敬意を払った」ことから考えると、シャー・ジャハーンはその2人よりもチシュティ派スーフイズムに熱心だったと言える。当初はアクバルからの影響を受け、後にアクバル以上に傾倒したものと思われる。アクバルやジャハーンギール、そしてシャー・ジャハーンの時代にチシュティ派がある程度台頭した理由をフォルツ R.C. Foltz は、「アクバルが初めてインドのチシュティ派に忠誠を示し、ジャハーンギール、シャー・ジャハーンも時にチシュティ派に庇護を拡大したが、それは

主にその派に対する民衆へのアピールだったのではないかと分析している。

シャー・ジャハーンの娘ジャハーン・アーラーの墓は、シェイフ・ニーザムッディン・オーリヤーのダルガー内にあり、また後の皇帝バハドゥール・シャーなどはシェイフ・クトゥブッディーン・バフティヤール・カーキーのダルガー内に葬られているように、独立した廟堂すら建てることなく、聖人の葬られている傍らに自らも葬られることを望んだ者もあったのである。尤も、ムガル朝はオーラングゼーブの治世以降急速に衰退するため、墓廟を建造する資金に乏しかったという状況にあったことも推察されるが、各人の崇敬する聖人の側にあろうとする点が興味深い。

ジャハーン・アーラーがチシュティ派の聖人を崇敬していたことは明らかであるが、シャー・ジャハーンがチシュティ派を信奉していたのかどうかは明らかではない。サルタナット時代初期からムガル朝全期を通じてインドにおける最大の影響力を有したのはチシュティ派であるから、シャー・ジャハーンもチシュティ派閥に属していたと考えてよいのかもしれない。